

## 鳥越一輝

常に前衛である自分を意識しています。  
1950年代、ここ福岡で生まれた奇跡の前衛美術集団「九州派」のように。

昨日までの自分を打ち破りたい。  
昨日までの自分とは違う新しい自分を発見するのだ。  
だから挑み続ける。

わたしはこれまで描き続けて来たストロークの限界を超えたいと思う。  
そこで生み出されたものが「水を操る」ことだった。  
アトリエが狭いわたしは外で描くことが多い。  
逆る水を操ることで、わたしは自然と融合する。  
そして、人間が持つエネルギーを凌駕することさえ可能となった。  
しかし、そのことは一方で人間の小ささも僕に示してくれる。

僕が挑み、革新することで、僕の作品に触れる人が、人間のちっぽけな限界を感じてくれるかもしれない。  
それは人にある種の「傲慢さ」を思い知らせることにきっと繋がるのだと思う。  
この地球は、人間のためだけのものではない。  
数限りなく生存するこの地球の中の生命体の一つでしかないことに気づかされる。

アーティストである僕が、たとえばウクライナのこととか、今回訪れた台湾と中国のことを考えてもやれることってたかが知れている。  
でも、キャンパスの上で自分が精一杯に生きること、人にある種の「謙虚さ」をもたらすことが出来たら、とても幸せなことだと思う。